

上方講談師・

旭堂南海に語る大阪怪談百物語

2004年8月25日(水曜日)午後7時～9時

ドーンセンター・和室

- 講談とは・・・講談は、昔は講釈とも呼ばれていました。辻講釈と言う言葉があることからわかるように、江戸時代初期に、生活に窮したちまたの浪人や軍学者達が「太平記読み」などに糊口を求め、門づけをして回って投げ銭を得たことが始まりだと言われていますが、やがて場所を固定した町講釈が出てきて、寄席演芸の一つになりました。木戸銭と言って、入場料を取ることを始めたのも、講釈の寄席からでした。一人で口演する芸で、落語とよく似ていますが、会話で話を展開させる落語と違って、地の文が中心になっています。台本を釈台に置き張扇を叩きながら話すのが特徴です。浪人出自の芸能であるために、武勇伝や仇討ち、お家騒動、政談のたぐいを得意としていましたが、やがて庶民の生活を描いた世話物や巷のニュースを講釈するなど、題材も多様化し、大いに人気を博しました。講釈師は巷の事件や噂をいち早くキャッチしてそれを講釈したので、講釈を参考にしてたくさんの歌舞伎や浄瑠璃などの作品が作られ、講釈の速記本は、大衆小説の起源にもなりました。

古川柳に「冬は義士、夏はお化けで飯を喰い」

江戸時代の講談師も、冬は赤穂浪士、夏は怪談話で食べていたと川柳に残っています。

講義一：●百物語とは・・・江戸時代初期(1659年)に刊行された「噺本」の事をさす場合もあるが、同年代の作家・浅井了意の仮名草子『御伽婢子(おとぎぼうこ)』(1666)の終章に、古来怪異譚を百語ると、必ず恐ろしく怪しき事が起こると書いある。その形式とは、おおよそ「月暗き夜、行灯に火をともし、その行灯には青い紙を張り、百筋の灯芯を一話終わる毎に引き抜いてゆく。同様の書として「古今百物語評判記」「新百物語」「御伽百物語」「太平百物語」などがある。

上記の「古今百物語評判記」(1672年)は、京都六条の俳諧師山岡元隣(1631-72)が自宅で行った「百物語会談会」での話題を、陰陽五行説にもとづいて合理的に判定したもの

ちなみに、「伽婢子」は都合68の怪異譚を収めている。また「婢子」というのは「死者を葬って供をさえる素焼きの侍女像」と「幼児の枕元に置くお守りの人形・御伽母子」をかけたものである。

講義二：「幽霊」と「化物」そして「妖怪」の定義

● 幽霊とは美人になるもの！？

→江戸時代の落語によると・・・女が亡くなりました。あの世の亡者の列を歩いていると、ぱったりと後から亡くなった近所の男と出くわしました。そこで、その女が、「亭主はどうしていましたか？」と尋ねると、男は「ああ、ご主人は新橋の芸者と仲良くなっていますよ」との答え。閻魔大王の裁きを受けるときに、その女房「どうか、幽霊の鑑札お授けください。そして、幽霊となって現世で芸者とうつつをぬかしている亭主を崇めてやりとうございます」と訴えると、閻魔大王は、女房の顔をみて、おまえには幽霊ではなく、化物の鑑札を授けてやろう・・・という出だしになっております。

→柳田邦雄の遠野物語によると・・・

「幽霊」は特定の場所と人に執着し取り付く。

出没时间：「草木も眠る丑みつ時、屋の棟三寸下がる」＝北東は、陰陽道でいうところの「鬼門」に当たる。鬼門は丑寅の方角とも呼ばれるが、これは午前零時を子(ねずみ)として、十二支を2時間毎に区切ったときにちょうど夜中2時(丑)と4時(寅)の間、夜中3時が「うしみつどき」ということを考え、時計の針が東北を指しているのを見るとわかりやすい。夜中の三時半頃、江戸時代、月も出ていない夜中に雪隠に行こうと屋外にでると、暗闇に家の棟が迫るように低く見える。

「化物」は特定の場所や人に取り付かない。

(例)一つ目小僧はちょっと脅かしてやろうと夕暮れ時に現れる。

→水木しげる氏によると・・・

「妖怪」とは、人や器物が化けたもの。長年使っていると愛着がわくものの、古くなったからと新しい台に代えて捨てようとする、器物も長い年月を経ると霊力をもち「つくも神」となると伝えられている。消費社会では新しい物が作られ、まだ使える多くの物が捨てられる昨今、ゴミを拾い集めては家に持ち帰り、近所から「ゴミ屋敷」と揶揄されるおじいちゃん、おばあちゃんはこの「つくも神」の化身かも？！

電燈が夜の闇を照らし明るくなって、「幽霊」や「化物」「妖怪」が住みづらくなった現在、闇は必ず存在する。昔は世の中が暗いので、人は明るくなろうと努めたが、今は世の中が明るいので、闇が人間の内に入ってきた。内なる闇の底深さが、昨今の悲惨な事件を巻き起こしているようです。

講義三、大阪の怪談

井原西鶴(1642～1693)による：浮世草子の創造者である。元禄前期に、上方を中心に活躍した人物で、俳諧師でもあり、そして浮世草子の作家として有名である。大坂の町人で、本名は平山藤五だと伝えら

れている。五十二歳で病没している。

西鶴は、寛永十九年、大坂に生まれた。彼の祖父は京都の伏見の商人だったといわれている。徳川政権樹立後、衰微した伏見を退散して大坂に移り住んだようである。祖父の代も父の代も、比較的裕福であったのか生活に困るようなことはなかったと推定されている。しかし、その家業、職種については不明であり、係累も殆ど判っていない。

十五歳にして俳諧を志した。当時、町人層の間では俳諧は文化的素養として必須の学習であり、経済活動の上でも、貴族階級との社交手段としても、もっとも一般的な社会的地位の位相、つまりステイタスシンボルであった。

寛文二年、彼は二十一歳で、俳諧の点者になった。この点者とは、俳諧の撰者として公認されていた判者のことである。西鶴は西山宗因に師事し、談林派に属する俳諧師として、目覚ましい活躍をすることになる。通俗卑近を旨とし、低俗化の傾向にあった新興談林派俳諧であるが、中でも特に西鶴は、新奇で異風な作品は「阿蘭陀流」と呼ばれたりすることになる。処女撰集『生玉万句』の序文に記されているように、「狂句、かる口」の句集であり、自由奔放な俳諧的世界の拡大傾向であった。

延宝三年旧暦四月三日に彼の妻が死亡した。二十五歳で西鶴より九歳年下である。その八日に妻追善の俳諧は多くの師友とともに、『俳諧独吟一日千句』となって成立する。残された子供は三人で、法体した西鶴は大坂鑓屋町に西鶴庵をかまえて住んだ。子供三人のうち二人は早逝、残った一人は娘で盲目であった。

延宝八年五月七日夕刻から八日同時刻までの一夜一日、大坂生玉寺内で行われた西鶴の矢数俳諧は、その発句 天下矢数二度の大願四千句也 の通り、ひとりて百句続きの連句を詠む独吟で四千句を完成させた。この矢数俳諧とは京都の三十三間堂の通し矢の古式にならい、一昼夜に句をどれくらい詠めるかを競う競技であるが、この興行が西鶴の名を天下に知らしめたものである。既に二年前、彼は「阿蘭陀流といへる俳諧は、其姿すぐれてけだかく、心ふかく詞新しく」という詞書を付けて、こと問はん阿蘭陀広き都鳥 という句を詠んでいた。『伊勢物語』の東下りを踏まえた彼の俳諧文学への意思表示である。こういう西鶴を、俳諧の正統から孤立化した詩人とみる考えがまだ多い。西鶴の俳諧とは道化であり、和歌に対する地下つまり庶民の遊びであり、上流階級への背反であり、いわば異端の文学であった。つまり阿蘭陀西鶴という渾名は、それ自体が西鶴の俳諧仲間の「俳諧」であり、遊びであったのではないだろうか。それがオランダなのである。

天和二年三月二十八日、師である西山宗因が逝った。西鶴とともに宗因門下の大坂俳人として有力視されていた岡西惟中は、この頃亡妻追憶の心を抱いて西国への旅に出た。以後惟中は俳壇へ戻らず、西鶴もまた当時彼らが依拠していた大坂談林俳諧の結社の再建に積極的ではなかった。つまり大坂談林の俳諧師たちは、師宗因の死とともに、この異端の俳諧への情熱から醒めていたのではないだろうか。

だが、西鶴は彼が流行作家となった二年後の貞享元年六月五日、住吉社で、新記録を目指す興行を行う。大矢

数一昼夜独吟二万三千五百句奉納である。おそらく、これには西鶴自身の俳諧への自己確認、あるいは存在証明の意味があったのであろう。

それよりさき天和二年、師宗因没後七カ月後の秋、西鶴は大坂の荒砥屋可心方から、『好色一代男』を出版している。この本の出版には、門下の水田西吟が原稿の清書、巻末の跋文に関わり、西吟は、西鶴の草稿をまとめて出版にこぎつけたのだという。明らかに私家版の匂いが濃いし、荒砥屋という出版屋の屋号も気がかりではある。この本は発売当初より売れに売れた。それが西鶴を浮世草子作者にしたといってもよい。以後西鶴は詳説界の流行作家としてつぎつぎに傑作を世に問うことになる。西鶴の作品のいずれもが、元禄の町人や武士の実生活の様相を見据えた作品で、特に晩年から没後の遺稿には、登場人物に生命さえ記されておらず、経済社会の夢と現実の落差の間で、生きるために苦しむ無名の人間達を、ノンフィクション手法で描写した完成度の高い短編が多く含まれている。

元禄五年正月『世間胸算用』出版後、三月四日付の西鶴の書簡を見ると、「今程目をいたみ筆も覚不申候」と書かれている。ここには目を病み執筆もままならぬ西鶴の姿がうかがえる。この日付から二十日後の三月二十四日、盲目の娘が逝く。法名光含心照信女である。それから数カ月後の秋、西鶴は紀州熊野へ旅した。日本道に山路つもれば千代の菊 にはじまる独吟百韻がこの旅で成立した。のちこの百韻は西鶴の自注を加え、絵巻となって残されることになる。

翌元禄六年八月十日、西鶴は大坂で逝く。法名仙皓西鶴、享年五十二歳であった。墓は寺町誓願寺である。辞世の句に、浮世の月見過ごしにけり末二年 とある。このような西鶴を、松尾芭蕉は「浅ましく下れる姿」と去来抄で批評している。西鶴の十三回忌追善に万海という弟子の俳諧師は 蘭の香や名は埋れぬ艶隠者 と詠んでいる。世を捨てたのではなく、俗世間の絆からすこし離れた境涯に生きたということであろう。俗世間への未練を断ちきれず、出家隠者に徹しきれなかった西行、ただただひたすらに厭世的であった鴨長名、批判と理屈に終始した吉田兼好、彼らに比べ、西鶴の生涯は満ちていたのではないだろうか。

→ 好色物の作品が有名だが、その合間に『西鶴諸国はなし』（1685年）を刊行している。諸国の怪異譚を集めたもので、全35話のうち23話が怪談である。好色物の西鶴が「怪談」をまとめるたほどに、当時は「怪談」や「百物語」が流行していたとも考えられる。

①「姿の飛び乗物」:

池田市（呉服）と箕面（瀬川）が舞台

池田のある神社に子供たちが遊びにいくと、宮中などで身分が高い女性が乗る「女乗物」がぼつんと置いてある。誰がいるのだろうと思って子供たちが恐る恐る忍び寄り扉をあけると、芳しい香の中に十二、三歳の色の白い美しい女性が座っている。子供たちがいくら声をかけても顔をあげず、答えないので不気味になった子供たち

が家に逃げ帰り、夕暮れ時に親たちや役人とその場にやってきました。ときには「女乗物」はありませんでした。次に、「女乗物」が現れたのが南に一里ばかり下った箕面の瀬川。西国街道沿いにまたぼつんと置いてあった。駕籠かきの男衆4人が、「女乗物」をみつけるなり、扉をあけるとやはりうら若い女性が一人座っている。ここは人気のないところと見定めて、女の手をとって無理やり引きずりだそうとすると、女はすばやく男たちの喉元に飛び掛ったので、みな意識を失い、気がついたときには「女乗物」の姿はありませんでした。その後男衆たちはみな重い病の床についてしまいました。それから「女乗物」は高槻や、丹波笹山など近畿一円に現れ、乗物の中の若い娘に手を出そうとしたものはみな重い病に伏したそうです。

②「残る物とて金の鍋」生駒の暗峠と大阪平野区が舞台

大阪は平野に住む木綿売りの男が、奈良で商いをして背中に荷を背負い、帰り道暗がり峠の峠越え、汗をかきかき歩いていると、ふっと気がつくとも80歳ほどのじいさまが「峠越えは疲れるのお、すまんがわしをおぶってはいくまいか」と声をかけてきた。「じいさまをおぶってやりたいのはやまやまだが・・・ご覧のとおり背中に反物をたくさん背負っておりますので・・・」といいかけると、「いや、わしは軽い。心配するなあ。おぶってくれ」といわれ、じいさまを見るととても疲れている様子。夕暮れも迫ってくるのに、こんな山の中にじいさま一人をおいて行くのも気の毒に思い、男が「では、」と答えると、じいさまはひらりと男の背中に飛び乗った。確かにそんなに重くなかったのも、反物を背負い、じいさまを背負い、男は、おっちらおっちらと暗峠を越え河内の国へ戻ってきました。ちょうど鶴橋のあたりまで来たときに、じいさまが「ああ、ご苦労、ご苦労。少し休もう。」と声をかけ、またひらりと男の目の前に立っていた。「まあ、一杯やろう」とふっと息を吹きかけると酒樽が出てきて、もう一回息を吹くと今度は十五、六才の美しい娘が現れ、「さあ、一杯どうぞ」と杯に酒を注いでくれる。じいさまは、酒を飲むとふっと横になってうつらうつらと寝入りだした。娘は、じいさまが寝入ったのを確かめて、ふっと息をかけるとそこに二十一、二の紅顔の美少年が現れた。驚く男に娘は「わたしのいい人でございます。じいさまに知れたら、困りますので、黙っていてくださいねぇ」と言って、二人は楽しげに話をし始めたが、男はじいさまが起きはしないかと気がきくではないので、酒も飲まずにじっとじいさまの顔ばかりをみていた。暫くすると、じいさまが目を覚ましそうな顔で、あわてて娘に「おじょうさん」と声をかけると、娘がずっと息を吸い込み美少年の姿がきえました。「ああ。よく寝たのう」とじいさまが息を吸い込むと、娘の姿も酒樽も、じいさまの姿もなく、ただ金でできた鍋が一つ転がっていました。男は、その鍋を持ち帰り不思議なじいさまの事を村の古老に話すと「それは、大阪に昔からつたわる正和仙人じゃわい。自分が困っていても、自分より困っている人を救おうとするものだけ、金の鍋を授けてくださるのじゃ。その思い、金の鍋と共に

大事にしろよ」というお話。その後、その男の子孫たちも困っている人を助けたのでしょうか。もし、そうであれば今も平野の町のどこかにその金の鍋が伝えられていることでしょう・・・。

③「形は昼の真似」：道頓堀の芝居小屋が舞台

江戸時代の日本のブロードウェイ・道頓堀に井上播磨という浄瑠璃語りがおりました。井上播磨が「源平合戦」の「一の谷の合戦」を五幕の形式に仕立て、大好評を得て1年間のロングランになりました。連日連夜、熱演が続きました。ある夜、小屋の番人のじいさんが舞台の方から声がするのにも気が付き、さては、盗人かと覗いてみると、誰も操っていない人形たちが、刀を引き抜いて「やあー」と掛け声をかけて乱闘しているではありませんか。それは、井上播磨の語り、人形遣いの鬼気迫る動き、情念を掻き立てる三味線の音色が三味一体となり、連日連夜の演者の真剣勝負の熱演に、源平の戦いに命を掛けた武者たちの魂がついに人形に宿ったというお話です。

④「夢に京より戻る」

：堺市大道筋（柳町）と元・金光寺が舞台

堺の大道筋を、二十二、三の綺麗な娘さんが、白藤の花を手にもったように歩いているので、男が声をかけると、「わらわは、探しておるのじゃ」と娘。「何を探しているじゃ」と男がきくと、「この白藤の花を手折った奴をじゃ」と娘は答えた。確かに白藤の木は無残に折られておりました。これは・・・と男は絶句しました。実はこの白藤、かねて天皇が堺の金光寺の白藤が見事であると聞き及び、藤の花を根っこごと宮中に運ばせのですが、それから季節が来ても白藤は咲かなくなりました。そればかりか白藤の精が天皇の夢枕に立ち、「私を堺に返してください」というので、慌てて金光寺に戻したという謂れのある白藤だったからです。男は村に駆けもどり、白藤が手折られていると騒ぎ立て村人と共にやってくると・・・。白藤は、何事もないように見事に咲くばかりで、あの娘の姿もありませんでした。

⑤「身を捨てる油壺」：東大阪市松岡（松岡神社）が舞台

東大阪に11回も結婚をした女がおりました。顔は別嬪なのですが、家柄もいいのに、男運に恵まれずに11回も結婚をし、やがて88歳の老女になっておりました。貧しくて身寄りもなく、夜なべに紡ぎ仕事をしようと思っても、灯りとりさえありません。老婆はふっと思いつきました。近所には松岡神社があり、そこにはお灯明が一晩中灯っていました。神社のお灯明の油を少しぐらいいただいても罰はあたるまいと、暗くなると神社に忍び込んで油を盗んでおりました。やがて、神社の宮司さんも「あれ、最近、油の減りが多いなあ」と首を傾げていました。これは、きっと化物の仕業であろうと、ある夜屈強な神社の男たちが神社の中で様子を伺っていました。やがて、深夜に神社の扉がギョーと開き、ひたひたと灯明に近づく影がある。「でたなあ。化物！」と弓矢の名手がすばやく矢を放つと、ギャーという声に首が吹き飛ぶ音がした。「何者じゃ」と灯りをもって近づくと、なんとそれは老婆の変わり果てた姿でありました。「し

まった！」と思ったとたん、老婆の生首が空中に飛び、「油くれ！油をおくれ」と口から火をだしながら迫ってきました……。それから、この界限で、「油婆の首飛び」が噂となりました。夜中に、口から火を出して飛んでいる油婆の生首に追い抜かれると三年以内に死ぬといわれ、もし夜中に油婆の首にであつたら、必ず走りぬけという江戸時代の言い伝えがあつたそうです。

走り婆：天王山のトンネルの中で白装束の老婆に追い抜かれると、老婆は振り返り「遅いのお」と呟くのをみると大抵大事故に遭う。吉野では、夜自転車で走っていると、追い抜かず自転車婆がいて、やはり振り返り「遅いのお」と呟くそうです。

⑥「鯉の散らし紋」：大東市が舞台

今から 300 年ほど前、大東市に大和川が流れ込む池がありました。決壊することがないといわれるほどの大きな池がありました。その池の畔に、小屋を建てて、ある男が鯉を獲って細々と生計を立てていました。ある時、網に大きな真鯉が一匹かかっていた。市場に持っていくには惜しいなあと思い、生簀を作って放つてやると、鯉がおじぎをしたように見えました。一人暮らしだった男は、鱗に巴という字を書き入れて、可愛がりはじめました。鯉はだんだん大きくなり、18 年も一緒にこの巴という鯉と暮らしていました。やがて、巴と一緒に食事をし、一緒に寝床を共にしていました。ある時、世話をする者がいて、年上だが嫁をとらないかという話を持ち上がり、男は結婚することにしました。簡単な祝言をあげて、新婚初夜の夜だというのに、男はいつものように池に船を出して鯉を獲りにいきました。新婦が一人で留守番をしていると、バタバタと門口に駆け寄る者の足音、ガラッとあけた戸口には、二十二、三の白い波型の着物を纏った美しい女性が立っているではありませんか。「あの人は、私の男だよ。返しておくれよ。返さないというなら、この池を決壊させて、この家もお前の命もみんな奪ってやるから！！」と叫ぶではありませんが。脅える新婦からその話を聞いても、男は「気にすることはない。疲れていたんだらう。悪い夢をみていただけだらう」というだけでとり合ってくれません。翌日、男が鯉を獲りに池に船を出すと、網に大きな白い鯉がかかっている。よくよくみると、鱗には巴の文字が浮いている。「さては、おまえは巴か！」という、「共にすごした夜をわすれたかあ」と鯉が大きく身もだえすると、大きな池一面に荒波がたち、土手は決壊、夫婦もろとも流されて命を落としたということです。

講義四、その他の大阪の怪談 (1732 年刊『太平百物語』より)

①「松岡同雪。狐に化かされし事」

：大阪市上本町から谷町が舞台。

江戸時代に、松岡同雪という藪医者がありました。いい加減な薬をだすくらいの治療しかしないのですが、病気になる人は多く藪医者でもと診てもらう患者は後を絶ちません。

ある夜、戸口を叩く人がある。「今日は診療はしまいじゃ」というのですが、「一人息子がはしかにかかり苦しんでおります。どうか診てやってください。銀五枚お出

します」といいますので、駕籠も待たせております。」という男の声に、松岡は銀五枚と聞いて「では」と診療にでかけることにした。ながい事駕籠に揺られている間に、「こんなに遠ければ、銀十枚ならと言えばよかった」と欲なことばかりを思いながら屋敷に入っていきます。男の子が一人座敷に寝かされていましたが、もう、息がない。

「手遅れであつたのお」松岡がいうのですが、父親は「一人息子に何もせずに死なせたのであれば、あまりに不憫。せめて薬なりとも口に含ませてやりとうございます。薬を調査してやってください」と泣き付くので「ああ、分かった。あと銀五枚じゃぞ」と言って調査した薬を渡して帰ろうとすると、息を引き取ったはずの子供が、「お医者様、お医者様」と声を上げるではありませんか。そして、子供が目を見開き、松岡にしがみついて離れようとしません。「やめてくれ！頼む！やめてくれ！」と驚き泣き叫ぶ松岡がふっと眼を覚ましたのが、谷町九丁目あたりの墓地の中。狐でも騙されていたのかと起き上がったところ、雲間から月の光がさして、ふっと気がつくそれは十日前に同じようにはしかで死んだ子供の墓の前だった。驚いて走りだそうとしたときに、倒れたときに流した血で足が滑り、その墓石の角で頭をぶつけ藪医者、松岡は息絶えたそうでございます。

②「十作ゆうれいに頼まれし事」：大阪市上本町が舞台

上町大地は霊気の通り道その端で、上本町あたりのお話です。十作と伊作が二人で夜あるいていると、「このあたり、幽霊が出るって聞いてるで」と話をしていると、何か白いものが通った気配に、伊作は「出たあ」と気を失ってしまいました。十作は懐から短刀をだして、女の幽霊の前に仁王立ち。幽霊は「どうか、それで私をお切りください」というのです。十作「それはどういうことじゃ」と聞くと、「私は上本町のとある米問屋に勤めておりました女中でございますが、主とよい仲になってしまいましたのを、奥様にみづかり裏庭でひどい仕打ちをされて殺されてしまいました。この世に未練はございますが、もっと、未練がある者がこの私のお腹の中におります。その刀で私のお腹を引き裂いてこの子も成仏させてやってくださいませ」と幽霊がますます哀れな眼差しで近づいてくるのですが、十作は「いやや、そんなこと、わしはようせん、わしには出来ぬ」と断るのですが、「どうか、どうか、子供ともども成仏させてくださいませ」と迫ってくるので、十作は「そうか。」と息を整え「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏！」と唱えながら、その女の幽霊の腹に刀を振り下ろした。翌朝、上本町界限では「あの米問屋の御寮さんが狂い死にしまつたそうや」と大騒ぎ。幽霊は、あの御寮さんを恨み殺した上で、母子共に成仏しあの世に旅立ったそうです。

③「薬種や長兵衛金子ひろひし事」：堺市が舞台

まじめな薬種の長兵衛が天神さんにいくと財布が落ちていました。中をみると百両もの大金が入っている。すぐに役所に届けよう歩いていると、十兵衛が「顔色変えてどうしたんじゃ」と声をかけてきた、正直者の長兵衛が「いや、百両入りの財布を拾ったので、役所に届けに行くところじゃ」と答えると、「そんなところに、大金

が落ちているはおかしい。もしか盗んだ金かもしれぬ。盗んだ金からお前に濡れ衣がかかるかもしれんし。封を開けてはいかん。おや、もしかしたら、これは偽物の封印かもしれぬ。一晩お前の家においておけ。調べておいてやる」というもので、正直者の長兵衛は持ち帰り、翌朝家の前に何か置いてある。怖いものだから十兵衛を呼んで、空けてみると馬糞、なんじゃこれは狐の仕業じゃ、あの金も偽物であろう、馬糞ともども捨ててきてやると、正直者の長兵衛から受け取って、長屋の角を曲がると馬糞は捨てて、百両は懐の中、まんまと十兵衛に巻き上げられてしまった。大金を懐に堺から泉州に向けて十兵衛が海沿いにあるいていると、大きな鳥が舞い降りてきて、十兵衛を呑みこんで海の彼方に飛び去ってしまいました。後にはただ、何事もなかったように浜辺に波打つばかりでした。

大坂の怪談の特徴：

東京（江戸）との違い：大坂より江戸の怪談は、恨みが深い。大坂は単純、江戸は恨み殺した人の顔そっくりの子供が生まれ続けなど恨みが深い。

四谷怪談なども「重ね」といわれるほどで、明治に入って 17 歳で真打となり、派手な衣装と薄化粧で若衆俳優のような容姿で婦女子の人気を得た江戸の三遊亭円朝は、創作を始め、外国の翻案物を取り入れるなど新機軸を工夫し、文人などとも交友して近代落語の祖として評価が高いが、「怪談牡丹灯籠」に怪談は人間の神経がみせるものと真景ともじった「真景累ヶ淵」なども有名。またもともとは関西で、皿を割ったことに因縁をつけられるお菊さんは姫路城の播州皿屋敷が、東京では番町皿屋敷となり語り伝えられるようになりました。大坂は町人が主人公のペイソスのある怪談話が多いが、江戸は武士が中心の町血生臭く陰湿な怪談ばなしがおおいのでは・・・。

船場にまつわる怪談を一席・・・

船場に新入りながら手広く商売をしている道具屋「丸善」の一人息子が、7 月 20 日に老舗の呉服屋・奈良屋の一人娘と祝言をあげて 3 日目。息子と親父がこそそと 15 年前の話をしはじめる。商売を始めた元手は、は腹をすかせて泣いていた子供だった息子に飯をめぐんでくれる道具屋の様子を見てみると、古道具は転売すると儲かるということを知り、その店を手始めに、火付け泥棒で盗んだ骨董品を売り歩いているうちに、ほとぼりが冷めるまえにあの道具屋に持ち込んだものだから、怪しまれてお上に訴えられたのではと、お縄がかかる前に火をつけて蔵から 3000 両という大金をせしめて、大坂に流れ着いた。それを元手に商売をはじめた。骨董品の目利きもできるようになったが、ほんま物を商いするので、信頼はできても銭はたまらん。元手が底をついた 5 年前、昔とった杵柄で、乞食らを 20 名ほど集めて、泉州や和歌山のお屋敷に火をつけて騒ぎのうちに盗ませた具を並べれば、銭も溜まった。それでついについに船場に店を構えることができるようになった。またそろそろどこかに押し入らなくてはと打ち合わせをしているところに、廊下越しに嫁の声、親父は「あぁ、この話、嫁に知れたのでは・・・」と腕を組んだ。

翌日、番頭がここだけのはなしやけど・・・「老舗の娘さんもろたと思っていたら、なんと酒癖が悪く店の商品に傷つける上に、男には本当にだらしく、だれ彼と色目を使って、たちの悪いことで・・・」と吹聴するとあっという間に船場じゅうに知れ渡りました。実家にもこ

の噂が耳に入り、娘に「大丈夫か」と声をかけるわけでもなく、「奈良屋の看板に泥を塗る気か。他家に嫁いだ娘は女三界に家なしじゃ。もう家に帰ってくるな！」の言葉。娘には、思いもよらぬ言葉に動揺し、更に、噂が娘自身の耳にも入ってきます。丸善に帰って、夫に悪いところがあれば直しますのでと幾重にも頭を下げるのですが、夫は知らぬ顔。ますます、思いつめる娘はついに床に伏してしまいます。やせ細っていく上に、夫との三日の逢瀬で身籠った娘の腹は日増しに大きくなると、番頭が「あの老舗の奈良屋さんが、新参者のわたしらみたいなのところに一人娘を下げわたされた理由がようわかりました。だれ彼となく男を招き入れたあげく、ついに誰の子か分からん子供を身ごもってしまいました。」またその噂が娘の耳に入り、身籠った体はやつれるばかり、夫は知らぬ顔、寂しさとわが身を置く場のなさに、実家を目指して、ふらふらと店を出ようとするものだから、ついには座敷牢に閉じ込められてしまいました。もうそろそろ座敷から出してやろうと、扉を開けると産み月になった身重の娘がふらりふらりと実家に向かってあるいている後ろを、親父が後ろから突き倒し、よろけた娘を助けおこした振りをして「大事無いか。大事ないか」と抱き起こそうとし、「かわいそうになぁ。誰の子か分からん子を身籠って、気がふれてしもうたかぁ」と大声をあげる。娘はそれでも「家に帰りたい」と前にすすむものだから、「あぁ、分かった、気がふれても、実家に帰りたいとは、哀れなことよ。実家に帰ってゆっくり養生したほうがええ」と奈良屋に送り届けたものだから、これもまた船場の噂になる。送り届けたられた実家も、気がふれていると噂されている娘を座敷牢に押し込み、一人丁稚をつけました。やがて赤ん坊が生まれましたが、母親の元にはおいておけぬと、丸善が連れ帰ってしまいました。

子供とも引きはなされた娘は座敷牢の奥でぼんやりとしていると、丁稚が帰ってきて、天満からの帰り道、花嫁行列を見たと大声で話しています。それも、淡路町の自分がちょうど一年前に嫁いだ丸善へです。御大家の娘さんは家柄ばかり、苦労している新町の芸者を跡添えに嫁をもらったというのです。船場では、「どこの馬の骨の子かわからんのに、育てるとは流石丸善さんやなぁ」株があがったが、娘は薄暗い座敷牢ではらはらと泣くばかり、やがて丁稚にこうなっては髪を下ろして尼になりたいので、そこの剃刀をとっておくれというのです。懇願する娘の眼差しに丁稚は引き込まれるように、剃刀を座敷牢の格子越しに渡してしまいます。「おまえ、悪くないでえ」娘は、全身の力でその剃刀を喉元にあてて横一文字に走らせました。「ギャー」声にならない声をあげ、血しぶきが部屋中に飛び散ったかと思うと、ゴロンと鈍い音、慌てて座敷牢の鍵をあけて駆け寄った丁稚が見たのは、血しぶきの中にある娘の悲惨な姿、更にこの生首、ゴロンドロンと転がって、怖くて動けない丁稚の頭の上をよぎって宙に浮いたかと思うと、ヒューと座敷牢から飛び去ってしまいました。次に娘の生首が現れたのが、本町堀のあたり、娘の生首が何処へいこうかぁという表情をしたとたん姿を消してしまいました。

そこは丸善の二階、夫婦の杯を上げた二人が何やら話し合っている。「私はあんな赤ん坊よう育てられへん。あの子、始末して！」と話をしていたら、段下から親父さんの声、妻が段下に降りようとする途中に「ギャー」という声が響いたので男が覗きこむと、妻が誰かに髪をわしづかみにされたように逆立てて宙に浮いたまま、男が抱きついて妻を下ろそうとするが下ろせない。すると、どこからともなく、「やや子、やや子をかえして・・・」という娘の声、「どこに居るのじゃ」と振り返ると娘の生首が男の喉元に噛み付こうとするので、驚いた男は階段を踏み外し血を吐いて息絶え、宙吊りだった妻の髪が

切れてどさっと段下に落ちた音に駆けつけた親父の首に被りついた娘の生首。三人の死体を静かに見届けれると、やがて火の気がない奥の屋敷に火がつき、丸善は、火付けでもうけた身代も命ともどもなくしてしまいました。燃えさかる丸善の屋敷から娘の生首がヒューと飛び出した。その口には、赤ん坊をくわえ東に飛んでいきました。

それから、雨がそぼふる夕暮れ時、本町堀あたりで「何処へ行こうかなあ・・・」という表情をしながら赤ん坊をくわえて思案している娘の生首を見かけた人があるというお話でございます。



一 般：東政男・大杉和幸・片岡美幸・角井美由紀・窪田雄一・近藤美穂・佐々木エミ子・佐々木豊明・杉山健一・田中里佳・中西敬子・中西紘一・長尾和徳・辻昌久・細川良美・早矢仕千春・東畠信男・本多真二・西正弘・山田良子・山崎如代・米田有紀

塾 生：鍛冶睦子・北原祥三・熊谷京子・下野譲・杉山英三・塩本妙子・神野茂樹・中島一・原季美子・原田彰子・林章・平野康子・広里重子・堀内紀江・村上蕪芳

怪談話によせて

学生時代、友人二人と真っ赤な彼岸場花が小道の傍らに咲く小道を散策しながら、京都は北白川の曼殊院を訪ねた。庭を眺めたりしながら座敷の置くに目をやると、襖がほんの少し開いている。このほんの少しが微妙なのだが、きっちりと閉めてあると空けてまで覗こうとは思わないし、きっちりと開けてあると、内側が見えてあえてのぞく必要もない。ただ、ちょっと襖が開いているのが、人間の心理をいかにも駆り立てる。二人とも吸い寄せられるように襖のちょっと開いてある隙間に近づいた。友人が先に覗き込んで「あっ」と声をあげて、後ずさり。後ろから覗き込んだ私も危うく大声をあげそうになった。実はその隙間から見たのは掛け軸で、それも、幽霊が今にも抜け出しそうに浮かんでいる。やせ細った体に白い着物を羽織り、お岩さんのようにただれたうとばれた目をした幽霊だった。

「幽霊の掛け軸・・・」怖いもの観たさに、襖の隙間に目を差し込むようにしげしげと掛け軸を眺めていると、「怖いと思ったけど、じっと観てたらなんや可哀想やねえ」と友人が言い出した。女同士の連帯感というか、こんな姿になってまで恨みつづけるなんて・・・きっとひどい

ことをされたのだ・・・私も加勢するように「そうやねえ。幽霊は怖くないわ。怖いなんて言うたら、可哀想やわ。ほんまに怖いのは、こんな姿にした、怨むようなことをした犯人やのにねえ・・・」

相手が絵から飛び出ない幽霊だと安心して、幽霊は怖くない、幽霊になるほど追い詰めた犯人の方が怖いと、掛け軸を前に、結論を下した。

特に、昨今は、とんでもない事件続発で、その度に、殺された者よりも殺した方の人権が重視される。時には、逆手にとって未成年の隠れ蓑にして殺人を犯しているのではと思える事件さえある。未成年者が殺人を起こしても処罰は軽い、名前も公表されないのに、殺された者は、二度と墓場から出ることができない。

かつて日本人は、幽霊という存在を通して、あんな殺され方した可哀想や、苦しかっただろうという同情心やら、悪いことをしたら、人を殺したりなどすれば幽霊が現れるという道德観をも叩き込んでいたのだろう。

近年ではコンクリート詰めされて殺された女子高生や、何の罪もないのに理不尽に殺された池田の小学生など、幽霊になって出てきてもおかしくないほどの仕打ちを受けたという殺人事件ばかりなのに、幽霊は現れない。日本人は日常茶飯事の一部として、あゝまた殺人事件だというくらいの関心しか持ち合わせなくなった。文明の力で町は明るくなった、日本人の心に巣食う闇の深さが気にかかる・・・。

今回の企画では、勉強家の旭堂南海さんから、大阪人が語り継いできた怪談話、特に井原西鶴が書き下ろした作品の数々を紹介いただき、締めには、船場の怪談話を一席。40分程の作品ながら、皆息を潜めながら、紙芝居ならぬ、耳で聞き込んだ話をそれぞれの頭の中で連想していた・・・。そして、幽霊よりも怖い闇が、人々の心の中に蔓延してるのではと感じるのは、私だけだろうか・・・。原田彰子

読売新聞 2004年8月28日土曜日 夕刊



関西を元気づける活動をする団体や個人を顕彰する「第7回なにわ大賞」を、大阪の市民学習グループ「熟塾」が受賞した。代表で会社員の原田彰子さん(45)は、「評価とは無縁と思っていただけに本当にうれし」。

大阪の文化や歴史をテーマに毎月、講座を開催。昨年は10周年の記念イベント

大阪の文化 楽しんで学ぶ

を、名付け親の藤本義一さんや文楽の人間国宝、竹本住大夫さんを迎えて中之島の中央公会堂で開いた。「名もないOLの依頼を心意気で引き受けて下さる講師陣、支えてくれた仲間のおかげ。ただただ感謝です」

同賞選考委員会委員長で作家の難波利三さんから賞状を受け取った時、舞い上がって、「次の10年もがんばります」と言ってしまう。「自分でも驚いた。やりたいことはたくさんあるので、やれる範囲で楽しみながら学び続けたい」